



家族と故郷へ帰る——。 生きることがすべてだった

「人間は1対1では殺さないから…」
母はそう何度も私に言い聞かせ、手を引いて一晩中逃げました。

↑後世に引き継ぎたいと芳子さんがこれまでの体験を記した手記、「私の人生論」。全39ページ。



与論開拓団の一員として祖父母と母、妹、弟、親戚の8人で満州へ入植した有馬芳子さん。当時14歳でしたが、敗戦により入植後わずか1年で満州を追われることになりました。その頃、沖縄や与論島を含む奄美群島はアメリカの統治下となり帰島できない状況。新たな土地を求め、ゼロからの再出発を余儀なくされました。当時の状況を、芳子さんへの取材と、手記をもとにお伝えします。

開拓団に届いた3日遅れの知らせ
日本敗戦の知らせが与論開拓団に届いたのは8月18日。3日遅れての知らせでした。すでに日本の敗戦を知った現地住民は、土地を奪われた恨みから暴民と化し、開拓団は逃げの間もなく、満州の住民らに襲撃を受けます。その頃、ソ連軍の満州侵攻に備え、開拓団の若い男性たちも戦場に召集されていました。開拓団に残っていたのは、そのほとんどが高齢者や女性、子どもたち——。

「抵抗もできず、すべての食料や家財、衣服が奪われました。武器を持った暴民の襲撃はさらに続き、逃げ場を失った人たちは、ため池で入

水自決を図りました。自決といっても、頭を押し込んで殺してもらったようなもの。地獄のようでした」。

日本へ帰国できたのは、敗戦の翌年6月2日。50人以上の自決に加え、引き揚げまでに40人以上の団員が栄養失調で亡くなりました。残った団員たちは、引き揚げ後の生活について考え始めます。「故郷の与論に帰りたいが、家や土地といった財産はすべて処分している。周囲の反対を押し切って移民した人もいて、帰りたくても帰れない人が多かった。内地でもう一度、開拓をやり直すという声は自然と上がっていた」と当時の記憶を振り返ります。

犠牲を忘れず新たな地を求めて

与論開拓団は、昭和21年6月、満州から博多港を経由して鹿児島へ引き揚げました。当時、沖縄や奄美群島はアメリカの統治下に置かれていたため、密航以外に与論に戻る手段はなく、霧島や出水、川内などを候補に新たな入植地を検討。水と薪が豊富な田代に決めました。「与論でも満州でも、水と薪を得るのに苦労したからでしょう」と芳子さんは続けます。鹿児島市の収容所から20人

の先遣隊と、炊事を担当する女性4人が、昭和21年7月18日に田代大原に到着。芳子さんも家族を残し、16歳で炊事班として同行しました。先遣隊は、現在の集落入口にテントを張り、初めて見るスギや雑木の深い森に圧倒されつつも、不十分な道具で慣れない伐採作業を始めます。伐採した木を下草と一緒に焼き払い、株間を耕作。小さい株なら3年から4年で伐根できましたが、大きなものになると10年以上経たないと抜けません。入植初期は人海戦術による焼畑農業でした。作業は困難を極め、さらに食料不足から栄養失調に陥りますが、なんとか8月までに40軒を開墾し、芋や野菜を植え付けました。年末には54戸165人が入植。多数の仲間を亡くした「盤山を忘れない」を合言葉に集落の名は盤山に決まりました。

デラ台風 / ルース台風の襲来

昭和24年6月、鹿児島に上陸し九州を縦断したデラ台風。死者252人・行方不明者216人・負傷者367人の人的被害に加え、住家全壊1,410棟など甚大な被害を与えた。2年後に襲来したルース台風でも400名を超える死者を出した。

前を向き一歩ずつ集落を築いた

「芋、麦、陸稲、ソバとなんでも作りました。食事はアザミやクワの葉など食べられるものは石うす দিয়ে いて雑炊に。味付けはわずかな塩や味噌。ムカゴや茶がらも食べていた」と芳子さん。昭和23年には開拓農協を設立、24年には自力で水力発電を整備し、各戸の電灯や精米、製粉、製材用の電力も賄えるようになりました。さらにこの年、盤山青年団を結成。敬老会や演芸会を開催し、与論の唄や踊りで賑やかだったそうです。しかし、毎年のように台風被害を受け、昭和24年に襲来したデラ台風では死者3名、2年後のルース台風では住宅5戸が全壊。農作物の被害も甚大で、このまま農家を続けるか判断を迫られていました。



17歳のとき家族で与論島から満州へ移住した。満州開拓団は徴兵がないという約束だったが、ソ連軍が侵攻してきたため、開拓団の若い男たちも徴兵された。敗戦後はハルピンを経由して帰国。家族は先に田代へ入植していました。当時は丸太を組んで茅をかぶせただけの家。当然、電気も通っていない。日本軍が使っていた発電機を運び出し、自分たちで設置。ロウソクも買えない生活が続いていたので、家に電灯が灯ったときのことは忘れられない。

「とにかく生きること必死だった」と語る

Interview 森徳一さん（盤山自治会）

昭和21年 満州から鹿児島へ引き揚げ
昭和21年6月3日、博多港を経由して鹿児島の伊敷収容所に到着。
昭和21年7月17日、先遣隊20名と炊事班が池田福利隊長の引率で収容所を出発し18日に入植した。
昭和22年 田代盤山に先遣隊が入植
先遣隊に続き約50人の団員と5名の炊事班が入植した。結果的に54戸、165人が田代に入植。総会を開き集落名が盤山に決まる。
昭和23年 各班ごとに家畜を導入した
牛8頭と、豚7頭を導入し、作業班ごとに1頭ずつ割り当てた。
昭和24年 開拓農業協同組合を設立
盤山青年団の結成と国歌作成
24名で青年団を結成。町清之進組合長の「渴しても盗泉の水は飲まず」を合言葉に団歌も作成。年中行事も決めた。
昭和24年 水力発電で各戸に電気が通る
6kwの発電で、電灯や製材用に使った。
昭和24年 デラ台風 / ルース台風が襲来
デラ台風では3名の死者が出る



6kwの発電で、電灯や製材用に使った。



24名で青年団を結成。町清之進組合長の「渴しても盗泉の水は飲まず」を合言葉に団歌も作成。年中行事も決めた。



先遣隊に続き約50人の団員と5名の炊事班が入植した。結果的に54戸、165人が田代に入植。総会を開き集落名が盤山に決まる。